

| | |
|---------|--------------------------------------|
| 氏名(国籍) | 趙美京(韓国) |
| 学位の種類 | 博士(文学) |
| 学位記番号 | 博甲第2742号 |
| 学位授与年月日 | 平成14年3月25日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 |
| 審査研究科 | 文芸・言語研究科 |
| 学位論文題目 | 〈他者〉のおごり —大江健三郎の初期作品を中心とする〈他者〉表象— |
| 主査 | 筑波大学教授 博士(文学) 荒木正純 |
| 副査 | 筑波大学教授 博士(文学) 阿部軍治 |
| 副査 | 筑波大学教授 井上修一 |
| 副査 | 筑波大学教授 名波弘彰 |
| 副査 | 筑波大学講師 吉原ゆかり |

論文の内容の要旨

本論文は、大江健三郎が文学活動を開始した1950年代後半から1960年代後半の、いわば初期作品群を対象にし、いかに大江が日常社会から〈他者〉を選別し、いかにそれを表象したかを追求したものである。

著者は、上記の課題を〈個人〉と〈他者〉および〈社会〉と〈他者〉の関係の枠組みのなかでおこなっており、論文の構成は以下の通りである。

序章 大江健三郎の〈他者〉意識——一九五五年から一九六七年まで—

第一部 〈個人〉と〈他者〉

第一章 〈他者〉から〈主体〉へと—『死者の奢り』の〈他者〉意識—

第二章 〈主体〉と〈他者〉の戯れ—または、『偽証の時』の〈本物〉と〈偽者〉の戯れ—

第三章 占領下の〈犠牲〉—『人間の羊』における〈沈黙〉の状況—

第二部 〈社会〉と〈他者〉

第四章 〈辺境〉の〈他者〉＝〈少数民族〉(一) … 〈主体〉と〈他者〉と〈自己欺瞞〉—『青年の汚名』をめぐって—

第五章 〈辺境〉の〈他者〉＝〈少数民族〉(二) … 現代文学の課題としての多民族社会—『幸福な若いギリアク人』論—

第六章 内なる〈他者〉＝〈在日朝鮮人〉(一) … 『叫び声』からみる〈在日朝鮮人〉像—〈小松川事件〉と〈在日朝鮮人〉の表象をめぐって—

第七章 内なる〈他者〉＝〈在日朝鮮人〉(二) … 雑誌メディア・小説・映画の交渉にみる〈他者〉の変容—大江健三郎の『叫び声』から大島渚の『絞死刑』に至るまで—

第八章 内なる〈他者〉＝〈在日朝鮮人〉(三) … 『万延元年のフットボール』における〈他者〉表象—〈谷間の人々〉と〈在日朝鮮人〉の関係を中心として—

結章 〈他者〉表象の文学としての大江文学の可能性

第一部は、〈個人〉と〈他者〉の関係の観点から、第二部は、日本〈社会〉と〈他者〉の関係の観点から、大江の〈他者〉意識のあり方と描き方とを追求している。前者の場合、日常的現実から〈疎外〉され、〈主体〉として行動できない状況に置かれている〈個人〉を〈他者〉と位置づけ、後者の場合、日本〈社会〉における異民族や少数民族を〈他者〉と定位し考察をおこなっている。後者の〈他者〉に、日本人個人は位置づくことができないとも規定されている。

第一章では、『死者の奢り』が分析対象とされ、〈僕〉が、いかに〈他者〉的存在から〈主体〉的存在へと変容するが綿密にたどられている。第二章では、『偽証の時』が分析対象とされ、〈女子学生〉において、〈主体〉と〈他者〉、また〈本物〉と〈偽物〉とがいかに交錯し戯れあっているかが追求されている。また第三章は、大江健三郎の〈他者〉意識が、いかに第二部の〈社会〉と〈他者〉へ移行するかを、『人間の羊』の〈僕〉に不意におこった、占領下の〈犠牲〉の問題を扱うことで追求している。

第四章と第五章は、日本〈社会〉の〈辺境〉に存在する〈他者〉＝〈少数民族〉の表象を『青年の汚名』と『幸福な若いギリヤク人』に求め、それぞれ〈荒若アイヌ〉と〈ギリヤク人〉の表象のされ方から、大江の〈他者〉意識を追求している。第六章・第七章と第八章は、日本〈社会〉の内なる〈他者〉としての〈在日朝鮮人〉問題を、『叫び声』と『万延元年のフットボール』において、大江がいかに表象し問題化しているかを論じている。

そして、結章では、大江の〈あいまい〉の問題と〈他者〉意識の関係の観点から、これまで考察してきた論全体を総括し、本論文の成果と課題を呈示している。

審査の結果の要旨

本論文が対象とした大江作品をめぐる従来の読みは、実存主義的な観点からのものが多数を占め、明確に〈他者〉の文学として位置づけることはなかった。典型的な読みの枠組みは、「戦後の監禁されている状態」「閉ざされた壁のなかに生きる状態」「青年の徒労感」などであった。ところが、本論文は、ポスト・コロニアリズムやカルチュラル・スタディーズの理論的枠組みをもちい、そうした状況を〈主体〉と〈他者〉との観点から捉え直した。この企ては、従来の読みが、日本文化・社会の〈中心〉からの眼差しによってなされてきたという著者の批判意識から発し、著者みずからの日本文化・社会における位置（韓国人）が考慮され、〈周縁〉もしくは〈他者〉の眼差しによって大江文学を読み直すべきであるという立場を、著者が獲得することによって可能となった。この立場の妥当性は、結章で引用されている2001年の大江と小澤征爾との対談から読みとることができる。つまり、大江は、〈中心〉ではなく〈周縁〉的なものへの強い執着をみせ、〈周縁〉的なものが〈普遍〉的なものへと繋がる可能性があるとしているのである。

また、本論文の特徴は、少数民族を〈他者〉として位置づけたこと、また、〈他者〉を確定しやすい第二部の作品群だけでなく、〈他者〉の読みとりにくい第一部の作品にも、この問題性を読み込んだ点にある。結章で著者みずから述べているように、大江の「あいまいな日本の中の私」の「あいまい」が、『青年の汚名』の分析では十分に機能しないことに気づき、〈他者〉の概念を適用するようになったが、この発見を著者は、第一部の作品群にも適用するようになった。しかし著者の創見は、この〈他者〉表象をふたつに区分して考え、〈他者〉の概念をより具体的にとらえようとしたところにある。つまり、〈個人〉と〈他者〉の関係と〈社会〉と〈他者〉との関係であり、それにより論全体が統一されるだけでなく、論の深みが増したといえる。このような観点によって、著者は、大江文学の重要な方法的概念とされる〈あいまい性〉とは、〈主体〉と〈他者〉との関係性の問題であるという認識を獲得した。そしてこの問題系は、大江の他の作品群に登場してくる〈同性愛者〉や〈性的異常者〉、また〈障害児〉にも適用可能であるとし、この問題系の重要性を示唆した。こうしたことが、本論文の成果であるといえる。

こうした成果にもかかわらず、本論文には、欠点もいくつかみとめられる。まず、鍵的用語〈他者〉の多様に

よって、各作品の読みの多様性が抑圧されてしまい、各作品の特異性がみえなくなってしまうのではないかと危惧されることである。また、ポスト・コロニアル批評やカルチュラル・スタディーズの理論枠がもちいられているが、本論文では、ジェンダーの問題が扱われることがなく、そのため、大江における〈他者〉としての女性表象の問題が抜け落ちてしまった。たしかに、第二章で、〈女学生〉が議論の中心にすえられてはいるものの、それは一個の〈人間〉としてしか扱われることがなかった。

以上を総括していえば、こうした若干の欠点も、本論文が大胆に採用した卓抜な視点と綿密な読みに基づく成果の価値を減ずるものではなく、それは今後の課題としてよく、本論文は当該研究に寄与するところ大であると評価できる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。